

2 新たな挑戦

時代のニーズを見据え、高度な専門性を発揮しながら、新たな課題や分野に積極的に挑戦する。

(1) 総合リハビリテーションセンターにおける県域拠点としての役割の充実・強化

ア 障害者スポーツ支援拠点の充実

(ア) 障害者スポーツマルチサポート事業の推進

総合リハだけでなく関係機関との連携を進め、トレーニングや練習会・競技会・交流会を開催するとともに、スポーツ補助具のアドバイス・修理などパラアスリートを総合的にサポートする。

○強化指定選手等へのさらなる支援：【内容】卓球、パワーリフティング

○指導者の育成：【内容】公開講座の開催

(イ) 一般スポーツ団体との交流事業の推進

【内容】水泳、卓球、バレー（聴覚・知的）、ローリングバレーボール、アーチェリー

(ウ) 東京パラリンピック開催記念スポーツ交流会の実施

東京パラリンピックへの県民等の参加機運を醸成していくため、障害者を対象とする競技大会等を開催する。

【内容】卓球、アーチェリー、ローリングバレーボール、ローンボウルズ



イ 障害者スポーツの普及・啓発

(ア) 障害児スポーツ活動拠点づくりの推進

障害児が気軽に参加できるスポーツ教室の開催・体験機会の提供や、パラアスリートをめざす子どもたちへの専門的な運動指導の実施など、多彩なプログラムを提供する。

(イ) 障害者施設等へのスポーツ支援プログラムの実施

事業団の障害者施設をはじめ、地域の事業所等へのパラスポーツの体験会などの訪問指導を実施する。

ウ 県が設置するひょうご障害者総合トレーニングセンター（仮称）開設に向けた取組（令和5年度供用開始予定）

(ア) リハ中央病院との連携

「スポーツ医学診療センター（仮称）」との連携を図るため、関係部署間の連携体制を構築するとともに、必要な資格（アスレチックトレーナー、健康運動指導士など）やバックアップ体制等について検討する。

(イ) 福祉のまちづくり研究所との連携

福祉のまちづくり研究所が持っている機能と有機的に連携する方策について検討する。



エ 中央病院の新展開

(7) 「スポーツ医学診療センター（仮称）」開設に向けた取り組みの推進

- 令和3年度の「スポーツ医学診療センター（仮称）」の開設に向けて、改修工事及び機器購入等を行うとともに、令和2年度下期からの院内標榜・外来診療開始を目指し、具体的な診療体制を構築する。

＜改修工事内容＞
リハビリ療法部内の水治療用プールを、メディカルアスレティックリハビリスペースに改修（約 249 m ² ）
＜機器導入内容＞
リハビリ用機器類（運動療法機器 3 台、レーザー治療機器 1 台等）等の導入

○開設に向けた診療体制の構築 <ul style="list-style-type: none">・神戸大学から医師を招聘・理学療法士の専門的な技能・知識習得のための研修受講
○対象患者確保に向けた取組の推進 <ul style="list-style-type: none">・近隣の高校、大学の協力医等や他の医療機関に対する PR 活動の実施
○「ひょうご障害者総合トレーニングセンター（仮称）」との連携を図るための具体的な方策等について検討を実施

(イ) 回復期リハビリテーション病棟退院患者への訪問リハビリテーションの試行

- 回復期リハビリテーション病棟の安定した運営及び退院後のシームレスなリハビリテーションを提供するため、中央病院からの訪問リハビリテーションを試行し、令和3年度からの本格実施をめざす。
- 令和2年度においては、検討委員会を立ち上げ、実施方法の検討・準備及び試行による課題検証等を行う。
 - ・訪問地域・・・神戸市西区、明石市
 - ・開始時期・・・令和2年8月（予定）

オ 新「福祉のまちづくり研究所」の構築

(7) 新「福祉のまちづくり研究所」の構築に向けた取り組みの推進

- ISP02019の成果を踏まえ、10年後を視野に置いた新たな取り組みを推進するため、研究所の体制や機能を充実強化し、課題の解決を図る。

【現状の課題解決のための新たな取組】

- 総合経営戦略機能の充実強化
 - 知財関連業務をコーディネートする機能を充実し、総合マネジメントや知財を活用した経営戦略の企画立案等を行う。
- 介護・福祉・医療連携の促進
 - 研究所の既存空間（3階住宅都市交通実験室の一部）を企業と介護福祉医療現場との共同研究・情報共有空間として活用し、企業と研究所の連携、企業同士の情報交換、企業と地域ユーザーとの交流の場とする。
- 高齢社会の課題に対する取り組みの強化
 - 新万寿の家などの事業団内の高齢者施設や民間施設等と連携し、県

の施策とも整合性を図りながら、介護現場の人材確保や、安全で安心な介護を推進するために必要な介護ロボット等の導入の推進及びそれらを適切に使用することができる人材育成等の取り組みを強化する。

□生活支援ツール等の開発・活用

- ・高齢者の日常生活動作のひとつである「立ち上がり」の動作を計測し、要介護状態になるリスクを評価するツールとして開発した「Body-KIN（ボディキン）」の有効活用
- ・認知症の方の生活を支援するツールとして有効な生活支援システム（音声案内による自発的な行動の促しを行う機器）の開発・実用化

□ロボットケアマスター制度(仮称)の創設検討

□障害者スポーツの支援推進

- ・ひょうご障害者総合トレーニングセンター（仮称）の開設に向けて、センター内で密接に連携する部門で組織するプロジェクトチームを立ち上げ、具体的な連携方策等について、横断的に検討を進める。
- ・義足ユーザー向けのランニングアカデミーの開催

【ブランド力向上のための取り組み】

□ロボットスーツ HAL 西日本教育センターの運営

HAL の臨床活用における高い経験値を活かし、HAL を導入している病院等の臨床実施担当者向けの教育・研修を実施

□WHO協力センターの指定を目指した取組

高齢社会における健康寿命延伸に注力するWHOと同様の取り組みを推進し、協力センターの指定をめざす。

(イ) 介護・福祉・医療連携の促進（介護ロボット開発支援の推進）

- 「共同研究・情報共有空間」を積極的に活用し、次世代型住モデル空間における相談や機器評価の事業と併せて、介護ロボットの開発支援を強力に推進
 - ・定期的な企業との懇談会の実施や、高齢者大学（いなみの学園等）との提携
 - ・当事者団体と企業をつなぐ交流会の実施
- 介護ロボットワークショップの開催
 - ・介護支援機器分野への参入を考える中小企業向けセミナーの開催及び情報交換会の実施
- 介護施設と企業をつなぐ「介護施設のお困りごと発表会」の実施

(ウ) 「本当に役立つもの」の研究・開発の推進

- 「ユニバーサル社会づくりの推進に関する条例」で謳われている、「全ての人が、社会参加を阻害されることなく、自己実現を行う」ために役立つ、実践的な研究開発を推進

■兵庫県の委託による研究開発等■

- 改良型筋電義手の開発および普及促進
 - ・成人男性用義手(Carpe Hand TM)の販売開始(東洋アルミニウム社)
 - ・成人女性用筋電義手及び小児向け訓練用筋電義手の開発(外部資金 1/2、事業団 1/2)
 - ・社会生活を促進するための自助具開発
 - ・小野福祉工場で加工組立作業を実施
- 高齢者施設に適した自律走行型ロボットの機能・運用システムおよび施設計画(介護ロボット等を有効活用するための部屋の配置や廊下幅、部屋の間取りのあり方等)に関する研究
 - ・介護負担を軽減するための汚物等自動搬送機の仕様検討・試作、新万寿の家での試験運用と初期導入効果検証
- 介助用車椅子の安全な移動情報提示に関する研究開発
 - ・介助用車椅子の安全、安心な経路を提示できる電子マップの開発

■外部資金による研究開発等■

- 排泄支援アシストロボットに関する研究開発
- 認知症高齢者への生活・自立・介護のための空間的配慮とその評価に関する研究
- 認知症高齢者の逆行性喪失行動及びBPSD(行動・心理症状)を緩和する居住環境デザイン手法の構築
- 感覚統合能力(視覚・聴覚・触覚などの感覚を適切に脳内で処理する能力)評価インターフェースの提案

(2) 西播磨リハの機能強化

ア 西播磨病院の機能強化

(7) 摂食・嚥下支援センター(仮称)の開設

脳血管障害患者の摂食・嚥下障害機能向上にかかる治療実績を生かし、「摂食・嚥下障害」を早期に発見し、誤嚥性肺炎・窒息の予防及び安全に食べるための専門的な評価・指導を目的とする「摂食・嚥下支援センター(仮称)」を開設する。

○治療

入院のみならず外来での紹介による嚥下造影検査、内視鏡検査、リハビリテーション治療、摂食機能療法、生活・栄養指導を短期入院も含めて行う。併せて、摂食嚥下支援加算取得をめざす。

○相談：摂食嚥下障害看護認定看護師による看護外来相談の実施

○研修：研修・交流センターによる脳血管障害患者・家族への研修の実施

○情報発信：WEBや広報誌による情報発信

【目標】

病床利用率	95.5%
外来患者数	46.0人/日
摂食機能療法件数	1,585件以上

(イ) 神経難病リハビリテーションセンターの運営

目的別入院コースによるパーキンソン病患者の重症度や併発する症状等に即した診療プログラムを提供する。

イ 研修交流センターの充実

○喀痰吸引等研修（「医療的ケアコース」）の実施

受講ニーズを踏まえ、「医療的ケアコース」に限定し実施する。

項目	内容
受講者数	・10名の受講（法人内部 8名程度、法人外部 若干名）
演習 （6時間）	・喀痰吸引（口腔内5回以上、鼻腔内5回以上、気管カニューレ内部5回以上） ・経管栄養（胃ろう又は腸ろう 10回以上【滴下5回以上、半固形5回以上】）、経鼻経管栄養5回以上）
実地研修 （約2～3か月）	・各所属施設で実施 ※演習において一定基準をクリアーした者のみ
修了証の発行	・実地研修において一定基準をクリアーした者のみ

(3) 「くにうみヴィレッジ」の開設に向けた取組の展開

ア 日中サービス支援型グループホーム等の開設に向けた準備

○障害者グループホームの整備

令和2年4月：建築工事着工、10月：供用開始（予定）

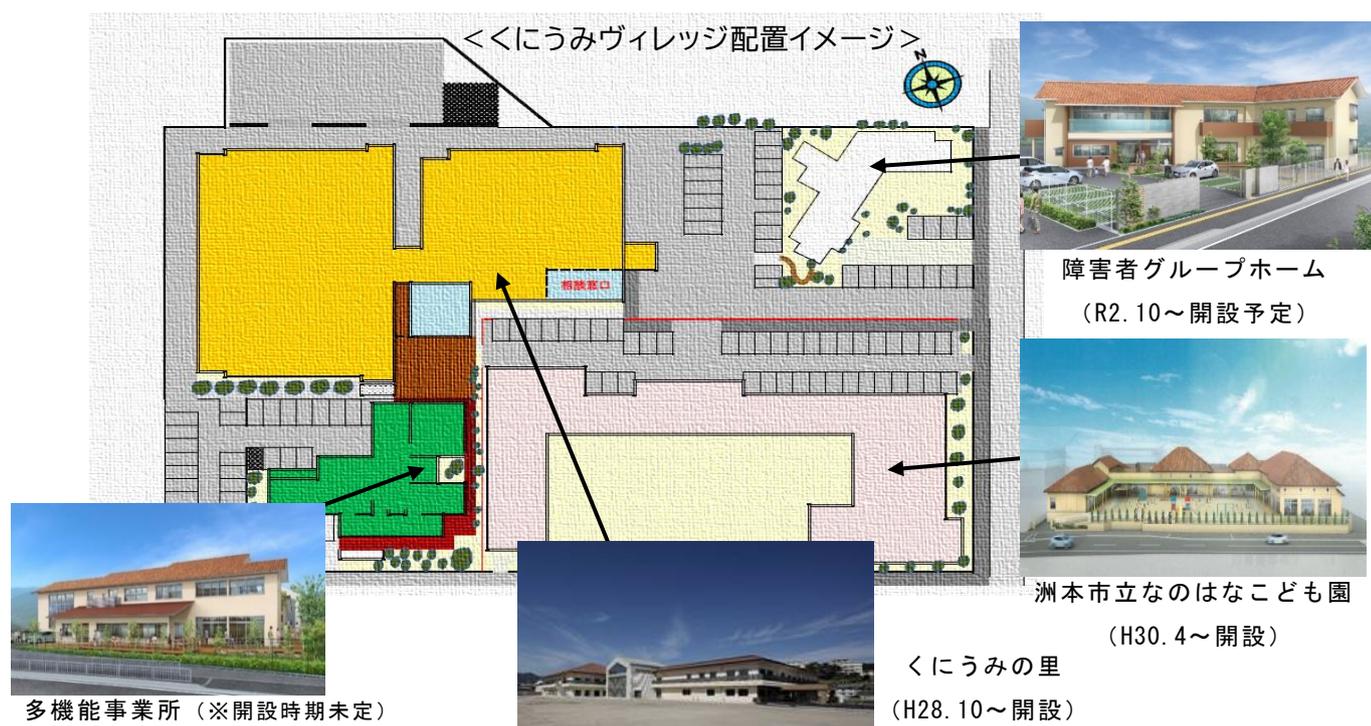
○障害者多機能型事業所の開設に向けた検討

建設着手に向け、設計の再精査、国庫補助金申請のための準備

イ 専門人材を活用した、子育てから介護、生活・しごとに関する相談支援の展開

○高齢者・障害者の総合相談窓口（くにうみの里内）において、入居相談、在宅支援相談、就労相談等の一体的な相談支援を展開

○事業団の専門人材（こども発達支援センター）の「洲本市立なのはなこども園」の子育て支援室への派遣等を検討



(4) 新「万寿の家」の移転整備及び開設

ア 移転整備の推進（特養：100床、短期：空床利用）

- 令和2年10月の供用開始をめざした整備を推進
- 利用者の安全・安心の確保と職員の介護負担軽減の両立
- 地域の安心拠点としてのユニバーサルな施設づくりを推進
- ニュークックチル方式による新たな食事提供体制の確立
- 汚物搬送ロボットの開発・設置 他

イ 介護ロボットの積極的導入等先導的取組の展開

- 介護ロボットの積極的導入と介護技術の情報・発信
 - ・多様なリフト、見守りセンサー、ベッド等の最先端の介護ロボットや福祉機器を導入し、利用者の能力を活かした自立支援及び重度化しないケアを提供
 - ・ノーリフティングケア認定施設として内部定着を図るとともに介護技術を外部に発信
 - ・福祉のまちづくり研究所とともに介護ロボット等の普及推進拠点としての役割強化
- ロボットケアマスター制度（仮称）の創設検討
 - ・福祉のまちづくり研究所と連携し、ロボット機器や福祉用具の活用及びノーリフティングケアを実践・指導できる人材を育成し内部定着を図る仕組みを検討
- 外国人技能実習生の受入、育成体制の構築



<新「万寿の家」完成イメージ>